

天津

新潟市観光説明会を開催

Tian jin

天津市内旅行エージェンツ13社25名が出席

11月15日(木)に、北京市のお隣天津市において、新潟市観光説明会を実施しました。今回の説明会は、新潟市が中国の中でも北京市の他に主要マーケットとして位置づけている天津市で観光関係者、農業関係者等を対象に、観光及び農業研修ツアーについて具体的な説明を行い、継続的に天津市及びその周辺からの観光客の誘致を図る目的で開催しました。

説明会は午前の部(天津市農業関係者対象)、午後の部(天津市内旅行社対象)の2部構成とし、新潟市観光交流課及び新潟市内旅行者より農業研修ツアーについて、詳細な説明を行いました。

午前中の農業関係者を対象とした説明会の冒頭、堀川武副市長が「本年4月に本州日本海側初めての政令指定都市となり、対岸アジア諸国からの日本の窓口として更なる発展を目指している。新潟市は日本の中でも有数の農業地域であり、食料自給率も全国平均の40%を大きく上回り、60%を超えている。米や花をはじめ、野菜、果物、畜産など多種の農畜産物も生産されており、38品目の生産高が県内トップである。農村の経済発展に取り組んでいる中国の農業関係者の方々から参考としていただくために、新潟の農業を視察していただきたい。」と挨拶しました。

また、中国側代表天津市農村工作委員会李樹起副主任は、「両市とも港町であり、大きな港を持っている。また、農産物においては、新潟には「コシヒカリ」、天津には「小站稻」(シャオ ジャン ダオ)というブランド米があり、梨も新潟には「ル レクチェ」があり、天津には「天津梨」がある。両市間において、お互いに努力・協力し合う事で、共に発展していきたい。」と挨拶がありました。



【農業関係者への説明会の様子】



【旅行社への説明会の様子】



左：【説明会翌日の旅行社訪問】

午後の部の天津市内旅行社を対象とした説明会では、来賓として出席いただいた天津市旅游局任炳信副局长より、「新潟とはチャーター第1便となる2005年以来、毎年延べ7便のチャーター便が両市の間を飛んでいる。旅行者は平和友好の使者であり、観光で中国天津と日本新潟の友好の架け橋を作り上げ、観光交流を本当の中日両国人民の友情の絆とし、両国人民がしっかり結び着くよう願っている。」と挨拶がありました。

午前、午後の説明会は観光及び農業研修ツアーについて、DVD、資料より詳細に説明を行い、特に午後の各社訪日ツアー担当者にPR並びにツアー企画のお願いをしました。

翌日も観光交流課職員、当事務所職員が市内旅行社を訪問し、前日行った説明会の感想、また、旅行社からの具体的な逆提案を受けたところです。

この事は、前日の説明会に13社25名より参加をいただき、真剣に説明を聞いてもらえた証だと感じ取ることができました。

これらの説明会を通じ、一人でも多くの観光客が日本、新潟へ訪れてくれるよう、今後も活動をしていきたいと思っています。

北京 上海 エアポートセールスを実施

Bei jing

Shang hai

11月13日(火)～17日(土)の日程で、堀川武副市長が新潟空港ビルディング桑原孝志社長、新潟商工会議所斉藤三夫理事・事務局長などの関係者とともに北京・天津・上海でのエアポートセールスのために中国を訪問しました。訪問先の中国国際航空、天津市交通委員会などでは中国首都圏との直行便開設について、また、上海の中国東方航空などでは新潟—上海線の増便について要請・協議を行いました。天津市交通委員会の劉煥虎副主任からは、新潟—天津便の開設について、天津市でも実現に向けてがんばりたい



【エアポートセールスを行う堀川副市長】

旨の発言がありました。また、副市長の訪中に合わせて、15日には天津市で観光説明会を開催しました。(前頁参照)

天津市への訪問で感じられたことは、天津市でも大規模な都市基盤整備が進められていることでした。天津市交通委員会劉煥虎副主任などのお話では、現在、天津空港は隣接地に新空港を建設工事中であり、来年5月に開業する予定であること、また、天津市内から天津空港まで地下鉄の工事中であるとのことでした。



【中国国際航空との協議の様子】

上海 新潟県産品展示商談会開催

Shang hai

中国側バイヤーが120名近く来場



【会場の様子】写真提供(右下含む)：第四銀行

11月19日から2日間の日程で、新潟県産品展示商談会(主催：財団法人いがた産業創造機構(NICO) 共催：新潟県)が上海の新錦江大酒店を会場に開催されました。この商談会へは新潟県内から14社のメーカーが出展し、延べ120名の中国側バイヤーと商談を行いました。NICOの阿部国際ビジネスコーディネーターによると、今回の商談会は上海で三回目を数え、上海から中国全土へ県産品の展開を視野に入れているとの事でした。

来場したお客様は自由に展示品に手を触れることができるほか、食品ブースでは試食、試飲コーナーも用意されていました。また、各ブースに1名の通訳を配置し、商談がスムーズに運ぶよう配慮されていました。ニット製品、

清酒、洋食器など県内の特産品が展示された中で、特に清酒と食品ブースへの訪問者が多く、新潟の魅力である「食」への関心の高さがうかがわれました。

NICOでは、上海だけではなく、毎年ハルビン(黒龍江省)で開催される商談会(新潟市も同時出展)へ出展しているほか、長春(吉林省)、瀋陽(遼寧省)、大連(遼寧省)の各種商談会にも参加しています。

これらの商談会にご興味のある方は、当事務所若しくはNICO、新潟市国際経済室までご連絡ください。

【連絡先】

- ・財団法人いがた産業創造機構 国際ビジネスチーム
TEL 025-246-0025
- ・新潟市産業政策課 国際経済室
TEL 025-228-1000 内線31621
- ・新潟市北京事務所
TEL +86-10-6517-2460



天津 新潟港振興協会天津港視察

Tian jin

10月26日、新潟港振興協会天津港視察団を迎え、中国有数の港である天津港を調査しました。この日は、前日からの霧が残り、事務所の窓から見る長安街も霞んでいました。北京から天津への出発はお昼頃であったため、晴れるかとの予想もありましたが、神戸市天津事務所からの電話では、北京―天津間の高速道路は閉鎖されているとのことでした。このため、大事をとり、天津までは鉄道を使用することとしました。現在、北京―天津間は、高速鉄道(和諧号。16両編成。※参照)により70分間で結ばれており、オリンピックに向けた軌道整備が終了すると30分間で移動が可能となる予定です。13時30分に予定通り、天津駅に到着。旅行社の用意したバスで、予定より30分前に天津港(集団)有限公司に到着しました。

天津市もやはり深い霧におおわれていましたが、案内をしてくれた楊陽氏によれば、5年程前からこの時期に霧が出るようになったとのこと。渋滞した道を走り、ようやくたどりついた港の先端部分で、天津港の現況と将来に向けた整備計画の説明を聴きながら、対岸の人口島(約30km²)に目をこらしました。説明によれば、天津港の水深は現在18.5m。掘った土砂で人口島を造成したとのこと。頭の中に計画全体の姿を描きながら、視察団からは熱心な質問が出され、楊陽氏からは丁寧な説明が返ってきました。国内外の視察で多忙な楊陽氏に感謝しつつ、コンテナを積んだトラックの間をぬうようにして帰途についた有意義な一日でした。

※和諧号(和諧とは調和・バランスの意味。現在、中国政府は都市農村間、地域間の格差を縮小するため、経済・社会のバランスの取れた発展を目指している。)



【説明を受ける視察団】

上海 上海進出新潟市企業訪問

Shang hai 上海でがんばっています。新潟市内企業。

11月20日、新潟市から上海市に進出している(株)コメリ、(株)リンコーコーポレーションの上海事務所を訪問しました。上海市は、四大直轄市(北京、天津、上海、重慶)の一つで人口は戸籍人口が1,368万人(2006年)、常住人口が1,815万人(同)。面積は6,340km²で群馬県とほぼ同じです。新潟―上海には、現在、週2便の定期航空路があります。

(株)コメリは1997年に進出。応対してくれた上海米利貿易有限公司の坂口副総経理のお話では、「上海では、日用雑貨の買付が主な業務。日本向けの品物が比較的多く展示される華東交易会などで調査を行い、購入については、サンプルを新潟の本社に送り、日本の基準にあっているか、安全性はどうかなどについて検査した上で決定している。」とのことでした。

また、(株)リンコーコーポレーションは2002年に上海進出。(実際には1997年に大連事務所として中国へ進出、その後、顧客ニーズに応える形で上海へ事務所を移転。)同上海事務所野口所長のお話では、「業務は、貨物受入からコンテナ詰めまでの日本への輸出サポート並びに日本から中国への輸入デリバリーサポート。上海市内の他、江蘇省や浙江省など長江(揚子江)流域の新潟県内企業を中心としたお客様の貨物を新潟港などへ輸送。新潟港との直行コンテナ船は週3便。」とのことでした。



【写真(左)】

上海米利貿易有限公司坂口副総経理



【写真(右)】

臨港株式会社上海代表処野口所長



西園寺 一晃先生の

中国問題リポート

NO.3

欲張りな「科学的発展観」

中国の指導者は大変だ。前任者の路線を引き継ぐと同時に、自身の特色をも出さなくてはならない。先ほど北京で開かれた中国共産党第17回大会で胡錦濤総書記は長時間の所信表明演説をしたが、演説内容の特色は何と言っても前面に掲げた「科学的発展観」だろう。これは胡錦濤体制の政治、経済、外交など各分野における政策実行の理論的根拠となる。

中国という社会主義国の最高指導者になるためには「マルクス・レーニン主義」をその時々の実情に合わせて「発展」させることが条件となる。毛沢東には「毛沢東思想」、鄧小平には「鄧小平理論」、江沢民には「3つの代表論」があり、それらは党の正式文書で認知されている。

毛沢東は革命を成し遂げ、冷戦という厳しい状況下で中国を引っ張ってきた。鄧小平は、中国が国際社会に復帰し、冷戦が崩壊するという複雑な状況下で、中国を毛沢東イデオロギーの呪縛から解放し、「社会主義市場経済」の道を開拓した。江沢民は鄧小平の切り拓いた道を大きく、強固にし、共産党を階級政党から国民政党へと転換させる理論を創造した。この中でも毛沢東思想と鄧小平理論はその本質において違うと言うこともできる。しかし、中国にとってはどれも「マルクス・レーニン主義の発展」なのである。状況が変わり、その変わった状況に合わせ、現実的理論を構築する。便宜主義と非難されることもあるが、これが中国の柔軟性なのだ。

有名な「白猫黒猫論」は鄧小平理論の根幹を成している。「白い猫でも黒い猫でも、ネズミを捕る猫は良い猫だ」、つまり社会主義的手法であれ、資本主義的手法であれ、経済を発展させ国民を豊かにするやり方は正しく、大いに取り入れるべきだと鄧小平は説いた。毛沢東は資本主義的なものを極端に嫌い排除した。しかし鄧小平は、資本主義的手法を経済の中に積極的に取り入れた。毛沢東は国を創り、国を守った。鄧小平は国を豊かにする道を切り拓いた。中国人にとってはどちらも必要であり、結果オーライなのだ。

さて、胡錦濤の「科学的発展観」だが、やはり時代の産物と言える。江沢民の後を継いだ胡錦濤は、当然のことながら成長路線を継続させるという任務を背負った。しかし今の時代は毛沢東時代とは根本的に違うばかりでなく、鄧小平時代、江沢民時代とも違う。当面している現実的課題も異なる。一言で言えば、鄧小平は中国を転換させ、江沢民は成長の道を通り走った。江沢民時代は、鄧小平の敷いた経済成長路線の果実が次々と実った時代と言える。高度成長のメリットが各分野で現れた。ところが、胡錦濤時代になって様相が変わってきた。急速な経済成長の歪み、デメリットが現れ始め、各種の社会矛盾を生み出したのである。さらに、好調な経済のアキレス腱が露呈し始めた。「中国問題レポート1」(北京消息創刊号:2007年8月1日発行)

で述べたが、成長の「光」の部分は輝かしいが、「陰」の部分は深刻だ。

格差は想像を絶するほど広がり、特に高度成長に取り残された農民の不満は爆発寸前だし、環境悪化も臨界点に達している。エネルギー不足もこのままでは成長の足を引っ張るし、エネルギー構成、エネルギー効率など問題は多い。潜在的には食糧問題もあるし、「一人っ子政策」による少子高齢化現象も顕著になっている。「高齢化社会」と言う言葉があるが、これには国際基準がある。65歳以上の人口が総人口に占める割合が7%を超えると「高齢化社会」と呼ばれる。日本は世界一で21%、中国は2000年に7%となり、現在は8%近くになっている。65歳以上の人口が1億人を越えた。こうして中国は発展途上国の中ではじめて「高齢化社会」の仲間入りをした。これは福祉の財源、労働力確保に黄色信号が灯ったということである。年齢構成のバランスは大きく崩れている。

胡錦濤指導部はこれらの問題に早急に取り組みねばならない。そのためには成長速度を適度に抑える必要がある。開きすぎた格差は是正しなければならない。特に人口の6割弱を占める農民の所得を引き上げなければならない。福祉の早急な整備も必要だ。環境悪化に歯止めを掛けなければならない。成長に必要なエネルギーを確保し安定供給を図らなければならない、エネルギー効率を高めなければならない・・・まさに難題山積である。

「科学的発展観」はこのような状況に対応すべき理論と言われる。つまり、鄧小平時代とも江沢民時代とも異なる課題に取り組むために胡錦濤が編み出したと言うわけだ。

胡錦濤の「科学的発展観」にはいくつかのキーワードがある。第一は「人間中心主義」。国民の多方面のニーズに応えるということ。特に弱者、負け組をどう救済するかが課題だ。第二は「バランス」。バランスのとれた発展の実現。そのためには都市と農村、地域間格差の縮小などが不可欠であると同時に、政治、経済、文化のバランスも重要視する。外交もバランスが必要という理解だ。国内的にはこれまで「棚上げ」されてきた政治改革、つまり民主化も当然入る。第三は「持続可能」。それにはさまざまな環境整備が必要だ。人と自然、開発と環境保護の調和が必要だし、エネルギー確保と合理的使用が必要だ。つまり、盲目的、がむしゃら、奇形的発展を排し、無理のない形で成長と発展を実現するということだ。

考えてみれば「科学的発展観」とはなんと欲張りなものか。中国のような大きな国が成長を始めれば、必ず「あちらを立てれば、こちらが立たず」という問題が出てくる。開発、工業化が進めば環境問題が出てくるし、市場経済をやれば必ず勝ち組と負け組が出て、格差が広がる。その中でも「三農」(農業、農村、農民)問題は複雑だ。現在のような零細農業は抜本的に変えなければならない。農村の都市化も必要だ。農民の所得を向上させ、都市住民との格差を縮小しなければならない。ところが、農村の近代化を進め、効率的農業を実現する過程で膨大な余剰人口が生まれる。現在でさえ、農村の潜在的余剰人口は2億人と言われる。この膨大な余剰人口をどこで吸収するのか。また農村の開発や都市化が進めば農地は減少する。すると食糧問題が出てくる。中国のような大きな国は、食糧を国際マーケットに頼

ることはできない。農民の生活向上は新たな内需の爆発を生むが、一方で成長を下支えし、外資導入の絶対条件となっている安い労働力の供給地が無くなることを意味する。現在の急成長を支えている3大要因の1つは「外資導入」だ。これが来なくなれば、中国の成長は大きな制約を受けることになる。

胡錦濤の「科学的発展観」はいわば「こちらを立てて、あちらも立てる」ことを実現するというのだ。まるで綱渡りのようだが、考えてみれば不可能なことではない。世界にはお手本がある。その一つは「成長と環境保護」の、日本の経験と教訓であろう。日本は急成長の中で、70年代ひどい公害に悩まされたが、見事克服（100%ではないが）して、経済成長と環境保護を両立させた。だからこそ中国は日本の環境技術、環境産業に熱い視線を送っているのである。その意味で環境問題（ビジネスを含む）での日中協力は無限だ。

「科学的発展観」がどれだけ力を生むのかは、今後の中国の状況を見るしかない。ただ確実に言えるのは「綱渡り」であろうが、「欲張り」と言われようが、中国は経済発展を続けながら、「こちら」も「あちら」も立てる努力をしなければならぬということである。

西園寺 一晃

【筆者プロフィール】

西園寺 一晃（さいおんじ かずてる）氏

1944年生まれ

- 明治の元勳・公爵・首相・枢密院議長である西園寺公望氏を曾祖父に持つ。
- 西園寺公一（きんかず）氏（第一回参議院議員・日中文化交流協会常任理事）の長男。
- 北京大学経済学部卒業
- 朝日新聞社に在籍中は、日中関係の調査研究室長などを歴任。退職後も中国問題の調査、研究にあたる。
- 現在工学院大学客員教授、北京大学客員教授、伝媒大学客員教授、北京城市大学客員教授



【北京王府井】

2007 北京国際旅游博覧会アンケート結果より②

今年の6月に開催された「2007北京国際旅游博覧会」会場で、新潟ブースを訪れた方々へのアンケート調査の結果を、前回からお伝えしていますが、今回はその第2回目。「新潟」の知名度について聞いてみました。

「新潟市」を知っていますか？の結果は右のグラフのとおりです。この結果は、私たち北京事務所職員の予想を良いほうに大きく裏切る結果となりました。結果では約3割の方が「知っている」と答えていますが、日々の活動を行う中で、「新潟市です。」と言っても、反応がないのが現実です。

「にいがた？どこ？」、「なんて読むの？」等が大半で、「新潟ですね！」と知っている方には、数字が表わすほどにはお会いできません。

旅游博覧会というだけあって、旅行に興味のある方が多く、また、新潟市のブースで行ったアンケート（凧のミニチュア、チューリップのしおりを回答者に贈呈）で気を遣っていただいたのかも知れません。

最近でこそ、コシヒカリの販売等の影響で、「新潟」という名前が知られてきたという感がありますが、それもほんの僅かです。

そこで、北京事務所が入居しているビルで同じく事務所を構えておられる日系企業にご協力をいただき、「新潟」の知名度について調査しました。

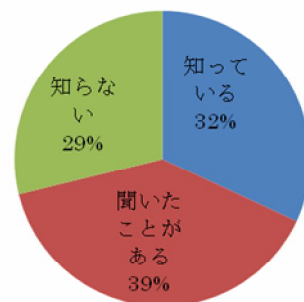
合計27名（男性13名、女性14名） 22歳～52歳（平均年齢28.8歳）結果は右図のとおりですが、「知っている」と答えた6名に更に「なぜ知っていますか？」、「新潟の何が有名ですか？」と、日本地図を示し、場所を指してもらうなど少し意地悪な質問をしてみました。「お米で有名ですね」と場所も正確に答えた方が1名、「子会社がある」2名（当然場所も合致）、「大きな地震がありましたね」2名（大阪・仙台をマーク）、「近畿地方ですよ」（大阪をマーク）という珍回答もありました。偶然「子会社がある」と答えた2名を特別な事例と考えれば、実質日系企業でも「新潟」を知っている方は1名（3%）でした。

今後更に新潟をPRしていかなければならないと感じています。

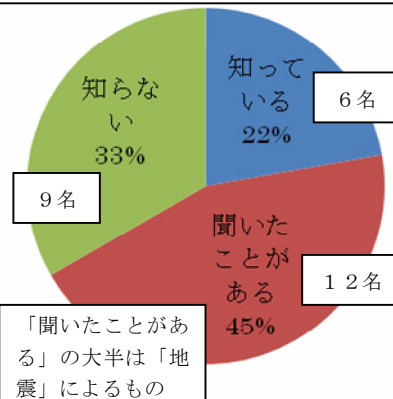
【ご協力いただいた企業】日揮株式会社北京事務所様・三菱商事（中国）商業有限公司様・丸紅（北京）商業貿易有限公司様（実施順） ありがとうございます。

Q2. 「新潟市」を知っていますか？

合計



日系企業で働く中国人に聞きました「新潟市」を知っていますか？



北京

（株）キタカタ（本社：新潟市）が北京で2店舗目の出店

Bei jing ラーメン専門店 「蔵」を北京市随一の繁華街 王府井にOPEN！

（株）キタカタ（本社：新潟市 中国国内では喜多方（北京） 餐飲料有限公司を独资で設立）が、昨年7月の日本料理店「喜多方」に続き2店舗目となるラーメン専門店「喜多方ラーメン 蔵」を今年の10月15日、北京市随一の繁華街「王府井」にOPENさせました。

（株）キタカタは、皆様ご存知のとおり、新潟では「越後茶屋」、「無尽蔵」等のお店を広く展開されています。

お店は高級ブランド店が軒を連ねるショッピングモール地下飲食店街の一角。開店以来、昼食時のピーク時には、84席ある店内が近くにある事務所で働くOL・ビジネスマン客でいっぱいになるとの事。来店するお客様の割合は、平日で中国人が7割、日本人が3割、休日はこれが5：5までになるそうです。

同社の福地さんのお話によれば、麺とスープにこだわっており、麺はカナダ産小麦を使用し、日本から持ち込んだ製麺機により店内で製造、スープに使用する煮干も日本から取り寄せているそうです。日本の味に忠実でありたいそうで、本物の「喜多方ラーメン」を提供したいという、同社総経理田村さんの意気込みが感じられます。

お店のイチオシは、やはり「しょうゆラーメン」（一杯19元＝285円（1元＝15円））との事。

王府井観光の後に、一杯いかがでしょうか。



【おすすめのしょうゆラーメン 1杯285円】



【店内の様子】



瀋陽

日中国交正常化35周年記念

瀋陽国際駅伝開催

Shen yang

新潟県チーム 総合 5位

10月26日の小雨の降る（夜には雪に）肌寒い中、日中国交正常化35周年を記念した「2007日中青少年友好駅伝大会」が瀋陽市において、35km8区間で開催されました。

日中合わせ33チームが出場した当駅伝は、在瀋陽日本総領事館が中心となり、中国関係機関と調整を図る中でようやく開催にこぎつけたとの事。

新潟県チームの結果は、選手の奮闘により2区間で区間賞、総合5位（日本チーム中3位）という好成績を上げました。

新潟県瀋陽訪問団として瀋陽市を訪れていた新潟県神保副知事、新潟市堀川副市長をはじめとする代表団も、選手達の力走に声援を送っていました。



【スタート前の新潟県チーム】中学生から大人まででチームを結成

北京こぼればなし vol.3

「福」が逆さま！？

～ 中国新年の飾り物 ～



毎年新年（春節）になると中国では、玄関などに赤い紙で「福」の字を逆さまに貼ってある様子をよく見かけます。これは、間違えて貼っているわけではありません。今回はこの風習についてご紹介します。

この風習にはいろいろな説がありますが、一般に伝えられていることは次のとおりです。

中国語で「福」の意味は「幸福・福運」これは日本と同じです。日本語で「逆さま」は中国語で「倒」（dao＝ダオ）、この発音は中国語で「到達する・着く」の意味の「到」（dao＝ダオ）と同じ発音なのです。もうお分かりになったと思いますが、「福」の字を逆さまに貼り、「福が来ますように」という祈りを表しているのです。

また、次のような話もあります。明時代、ある皇帝が「福」の字を暗号として、暗殺を企てておりました。その計画を心優しい皇后が知ることになり、皇后は夜が明けるまでに、城内全戸に同じ「福」の字を貼るよう部下に命じさせました。ところが、民衆が慌てる中、字の分からない一家庭では福の字を逆に貼ってしまったのです。翌日、それを聞いた皇帝が憤慨し、「福」を逆さまに貼ってある一家の皆殺しを命令しました。それを知った皇后は皇帝に、「あの一家は今日陛下がおいでになることを知ってわざと逆に貼ったのでしょうか。ほら、そうすると（福運が着く）という意味になるのではないのでしょうか？」と話し、皇帝もそれに納得し、結局命令を取り消しました。その時から人々は福の字を逆に貼る習慣になり、幸せを祈ると同時に心優しい皇后を敬ったのでした。

皆様も新年に「福」の字を逆さまに貼ってはいかがでしょうか。 (韓)